The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	わが国における看取りへの視座 ー宗教者によるケアの臨床哲学的探求からー
Author(s)	日髙, 悠登
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69708
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　（日髙　悠登）	
論文題名	わが国における看取りへの視座　―宗教者によるケアの臨床哲学的探求から―

論文内容の要旨

本研究は、日本国内の宗教的基盤を有した終末期医療施設であるホスピスとビハーラの宗教者によるケアの現状と特徴を中心に考察することにより、わが国における看取りの将来像を再考することを目的とする。

本研究は全７章から構成されている。「序章　本研究の臨床哲学的射程」では、研究を行なうにあたり、鷲田清一が提唱した臨床哲学を筆者がどのように解釈したか、本研究における意義と位置付けを論じている。特に、宗教者によるケアを主な考察対象とする際、宗教学だけでなく、哲学をも含意することが妥当であると考えている。死生を考究する上で、立ち現れたケアを文言として考察するのみでは不十分であり、ケアの核心をも捉えるには、考究を主要な営みとしてきた哲学が不可欠となる。中でも、本研究は現場を主要な概念として設定することに、臨床哲学的意義があると考える。筆者は、ケア分野における非実践者（Non-Practitioner）と非宗教者(Non-Priest)という立場から、終末期医療現場におけるチャプレンとビハーラ僧へのインタビューという、聴くことに加えて、訊くこと（問うこと）を行なうことにより、彼らが終末期医療に携わる際の思想を聴き、ケアの核心に迫っている。さらに、先行研究を用いて歴史的・理論的視点に立ち返りながら、多角的に論じることにより臨床哲学を補完している。特に、２１世紀現在という時間軸を立脚点としながら、看取りの歴史にも眼差しを向けているが、本研究で扱う時間軸に、ある程度自由な幅を持たせることにより、現在と過去の両時間軸の充足点と不足点を手掛かりとして看取りの未来を見出そうとするものである。

「第１章　看取りの学術的背景」では、哲学的・歴史的・社会的背景に焦点を当てて、医療倫理的・死生学的側面を含意して論じている。特に、人間としての尊厳を保てた死は迎えられるものなのか。私たちは安心して、どこでだけでなく、どのような状態で最期を迎えられるのか、という大きな問いに直面しており、宗教的基盤のあるホスピスとビハーラといった終末期医療施設において最期を迎えるという選択もあることが考えられる。わが国におけるホスピスは、ビハーラも最初の設立から２０～３０年以上が経過しており、それらにおいて行なわれる終末期医療は、社会的にも改めて真価が問われる時期に来ていることを提起した。

「第２章　先行研究の検討」では、①スピリチュアルケア関連研究、②ホスピス関連研究、③ビハーラ関連研究、④ホスピスとビハーラ比較研究における本研究の位置付け、計四つの観点を整理することで宗教者にも焦点を当てつつ、本研究の位置付けと研究方法を述べている。本章で取り上げている先行研究の多くは、わが国を対象に行なわれた研究が中心である。これは、わが国の看取りを再考する上で、文化的・宗教的・倫理的観点の三つに重点を置いているからである。①では、特に、スピリチュアルケアについて独自の解釈を行なっている。②と③では、ホスピス関連研究とビハーラ関連研究は、その多くが事例研究に留まって十分には検討されておらず、萌芽期の段階に留まっていることを指摘した。②～④全体を概観すれば、チャプレンとビハーラ僧以外に施設関係者による研究が多い他、チャプレン研究に至っては、インタビュー研究が大部分を占めているのが特徴である。しかし、研究者自身が宗教者であることを含め、宗教者の活動の有用性について肯定的活動として取り上げている傾向にあり、活動における課題と否定的側面をも含めた検討を行なったものは少ない。また、彼らが活動に際して有しているケア観という重要部分に焦点が当てられた研究が少ないことも、先行研究の特徴であった。

「第３章　看取りの宗教的形態――「臨終行儀」再考」では、僧侶により行なわれた看取りを歴史的・文化的側面から考察している。本章では、従来通りの死であったか、喜ぶべき往生か、あるいは絶対に避けるべき地獄か、という死への価値付けを〈差別化〉の概念から捉える。次に、差別化から大きく変化した現代における死を一般病院における最期から、積極的孤独死、自宅の畳の上での往生、終末期医療施設における最期など、多くの死の在り方が提示された〈選択化〉の概念から捉えて、両者の対比から論じることにより、看取りの宗教的形態への考察を行なった。僧侶によるケアは看護行為と宗教行為であり、合計で五つのケアに準じた方法が行なわれていたことを挙げている。そして、〈貴死社会〉から〈棄死社会〉への転換において、在日外国人をも含めた看取りに目を向けて、諸宗教者の

連携を構想した〈ユニバーサル・ホスピス〉の提唱を行なった。

「第４章　狭間のケア提供者たち――チャプレンとビハーラ僧を例に」では、彼らの活動における肯定的側面と否定的側面との狭間に置かれている状況について検討している。チャプレンとビハーラ僧の実態把握を行なう為に、活動するチャプレンとビハーラ僧へインタビュー調査を行ない、彼らの回答から主にケア観を考察した。調査対象とした終末期医療施設は計４ヶ所である。ケア観の特徴については、次のものが見出せる。淀川キリスト教病院のチャプレンへのインタビューからは、水平面と垂直面の関わりから述べられるように、神―人間という関係性に見られるキリスト教的基盤をチャプレンは明確にしている。チャプレン自身も限界を認めることで、臨床に携わることの難しさを内省的態度によって語り、患者と共にいることを目指している。そこにはキリスト教的死生観が如実に示されている。きぼうのいえのチャプレンへのインタビューからは、特にホスピスでは医療者による痛みの除去という形而上における考えのみでは不足と捉え、形而下における宗教の必要を認めていた。これらを言葉のレトリックのようなものであるとして、両者を統合する形而上、形而下の統一理論と思索、この世の可視的現象が必要であると捉えていた。また、他のホスピスとは異なり宗教間連携を行なっている。キリスト教を基盤にしているが、キリスト教には固執しない柔軟な姿勢を採っている。長岡西病院ビハーラ病棟のビハーラ僧へのインタビューからは、患者との関係を死別をも含めて肯定的な経験として捉えていた。また患者・家族も死を受容する際の心情を受け止める場がビハーラであり、そこに受け止める自分が存在している。あそかビハーラ病院のビハーラ僧たちへのインタビューからは、ビハーラ僧は臨床心理士との違いとして、患者の心理判断や評価をせずに、ありのままに患者に寄り添うことを主な立場としている。だが、ビハーラ僧さえも支えられているという思想が基になり、ケアに継続的に携われている。そして、わが国における看取りの課題に伴い、宗教者一人一人が看取りの協働を可能とする間主観的に創っていくケア観――〈間主観的ケア観〉が重要である。では、間主観的ケア観の生成は可能か。また可能であるとするならば、それは臨床において活動する以前の機会がどこで創られるべきか、ということも問われる。つまりここに、確たる臨床を創るにあたって臨床以前――〈プレ臨床(pre-clinical)〉と言うべき営みが必要であると提起した。プレ臨床は臨床哲学を構成する一部である。

「第５章　看取りの再考」では、臨床哲学とリンギス思想から看取りを再考し、次に医療文化の他、臨床哲学を再解釈して〈隣生哲学〉を論じている。互いが傍らにて生きること、現代医療という人間を基軸に展開してきた哲学とも言うべき看取りの再考によるものが〈隣生哲学〉である。隣生哲学は誰かの隣へ自らを置くことによって、共生の在り方を見出すことである。看取る者も看取られる者も、互いの傍らで生きること、それがもう一つの臨床哲学たる隣生哲学である。

「第６章　結論」では、結論に加えて本研究の課題について述べている。看取りは、看取られる者からすれば生の到達地点である。一方、ケア提供者からすれば、生の全体性を支えることへの努力に相俟って、看取りは試行錯誤の末に見出された知恵の集大成である。人間を生から死へ、そして死の先にある他界にまで送り届けるという、志向性の数々が看取りとして定着している。目に見える営みだけが看取りではない。時代により看取りの方法は若干異なるが、看取りの根底にある親愛と慈悲に支えられていたことには変わりない。時代という時間域を超えても、看取りが究極的に共通しているのは看取りの視座それ自体であると言える。看取りの視座とは、生き方を問う視座でもある。今回は、宗教者によるケアの実践を探求してきたが、非宗教者によるスピリチュアルケアも行なわれている。その為、彼らを対象にスピリチュアルケアの実際、ケア観を明らかにするインタビューにより、宗教者との思想的相違を明確にする作業も要される。また、ユニバーサル・ホスピスの提唱は、施設形態に限るものではなく、例えば、在宅ホスピスも視野に入れながら、将来的に実現を目指した構想として考えるべきものでもある。在日外国人の生老病死の諸事情と照らし合わせながら、フィールドワークを行なうことは必須である。特に、在日外国人とその子孫に対するインタビュー調査の他に、行政を含めたインタビュー調査を踏まえながら、ホスピス像をより具体化する作業を行ないたい。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　日高　悠登　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　浜渦　辰二 副 査　大阪大学　教授　堀江　剛 副 査　大阪大学　准教授　本間　直樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　わが国における看取りへの視座
—宗教者によるケアの臨床哲学的探求から—

学位申請者　日髙　悠登

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　浜渦　辰二
副査　大阪大学教授　堀江　剛
副査　大阪大学准教授　本間　直樹

【論文内容の要旨】

本論文は、日本国内の宗教的基盤を有した終末期医療施設である（キリスト教系）ホスピスと（仏教系）ビハーラの宗教者によるケアの現状と特徴を中心に考察することにより、我が国の看取りの将来像を再考することを目的としている。

序章「本研究の臨床哲学的射程」では、筆者なりの臨床哲学の理解に基いて、宗教者によるケアを考察するには、宗教学だけでなく死生を考察する哲学が不可欠と考え、先行研究による歴史的・理論的考察のみならず、終末期医療現場における宗教者へのインタビューも加えて多角的に論ずるとともに、看取りの歴史にも眼差しを向けて、過去と現在から未来へと目をむける姿勢を示した。

第１章「看取りの学術的背景」では、人間としての尊厳を保った死を迎えられるのか、私たちはどこでどのようにして安心した最期を迎えられるのか、という問いを中心に、宗教的基盤のあるホスピスとビハーラという宗教的医療施設で最期を迎えるという選択肢について、哲学的・歴史的背景とともに社会的背景をまとめた。

第２章「先行研究の検討」では、①スピリチュアルケア関連研究、②ホスピス関連研究、③ビハーラ関連研究、④ホスピスとビハーラ比較研究という４つの観点で先行研究を検討し、先行研究の到達点とともに不十分なところを確認することによって、非実践者かつ非宗教者である筆者により、宗教者の実践活動の肯定的な側面とともに否定的な側面も冷静に捉えることができるという、本研究のオリジナリティがどこにあるかを示した。

第３章「見取りの宗教的形態—「臨終行儀」再考」では、日本中世の源信の著『往生要集』に基いて、僧侶により行われていた看取りである臨終行儀を、そのうちに含まれた看護行為と宗教行為に従って分析し、浄土か地獄かによる死の価値付けという〈差別化〉が行われていたことを指摘し、それを現代においては、一般病院における最期、孤独死、自宅での往生、終末期医療施設での看取りなど、多くの死のあり方による〈選択化〉が行われていることと対比させた。

第４章「狭間のケア提供者たち—チャプレンとビハーラ僧を例に」では、チャプレンとビハーラ僧へのインタビュー調査により、彼らのケア観を考察し、彼らが医療における肯定的側面と否定的側面の狭間、社会的なものと医療的なものとの狭間など、さまざまな狭間でケアを提供しているいう実態を浮かび上がらせた。

第５章「看取りの再考」では、「自ら思考し、現場に踏み入れ、発見し、獲得したものを練り上げ、社会へ還元していく」臨床哲学を〈隣生哲学〉として捉え直し、リンギス（現代米国の哲学者）の「死にゆく者とその傍に居ようと努める者との関係」をめぐる思想を手掛かりに看取りを再考し、「宗教者一人ひとりが看取りの協働を可能とする〈間主観的ケア観〉」を提示した。

第６章「結論」では、これまでの議論を振り返ったうえで、「看取りは、自己と他者との間において、ケアという行為を介して形成される生の実践的な哲学」であるとして、「死を見つめ直す感性を養うという意味で、深淵に迫る営み」として「看取りの哲学」の必要性を説いた。

全体の分量としては、Ａ４判横書きで 166 ページ、400 字詰め原稿用紙に換算して、約 466 枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現代における「看取り」の問題、とりわけ宗教者によるケアの課題を、歴史文献や実践者へのインタビューを交差させる形で幅広い視野から多角的に考察したところに特徴がある。特に、宗教者による看取りを（死を遠ざけようとする医療・社会と、それでも死に向かい合わねばならない人間との間の）「狭間のケア」の問題として浮き彫りにした点や、伝統的宗教とは異なる視点からスピリチュアリティについてヒンギスの思想を手掛かりに論じた点など、従来の医療や宗教の側面だけからのスピリチュアルケア論とは異なる独自な視点として評価することができる。

公開審査会では、日本語の先行研究については詳細にフォローされているものの、外国語の先行研究の渉猟がおろそかになっているのではないか、また、「死の差別化／死の選択化」「貴死社会／棄死社会」「間主観的ケア観」「隣生哲学」など、独自な造語を十分な説明のないままに多用するあまり、事柄に対する正確な説明・分析に欠けているのではないか、といった疑問や、ポスト宗教における宗教性を考察するうえで重要な意味をもつと思われるヒンギスの思想が表層的にしか論じられていないのが残念だ、実践者の実相に迫るインタビューによってその実践の哲学的な解釈と意義づけがなされるまでには今後の研究における一層の取り組みが期待される、といった指摘もされた。

しかし、これらの疑問は、今後取り組むべき課題を示すものであり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が、「看取りにおける宗教者のケア」という問題を宗教学・歴史学・社会学・哲学が交差する、独自の臨床哲学の観点から考察したという点において、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。